

センナリスナギンチャク

Hydrozoanthus gracilis (Lwowsky, 1913)

クマノミとイソギンチャクなど刺胞動物と共生する動物は多い。それは、共生者が刺胞動物の刺胞を防御に利用しているためと考えられている。また、サンゴのひしめく海底では、サンゴ同士が場所をとりあってケンカすることがあるが、その時に使われるのも刺胞だ。やはり、刺胞は動物界において強力な武器なのである。しかし、時には刺胞動物同士が接触しながら共存していることがある。写真は、スタレガヤの樹枝状群体の上に生息するセンナリスナギンチャクである（右上が全体の様子で、左下が拡大したもの）。このように、刺胞動物上に棲む刺胞動物の例は、実は意外にいくつも知られており、ウスアカイソギンチャクは八放サンゴのヤギ類の上に生息するし、ヤドリイソギンチャクの幼若個体はオワンクラゲに付く。スズフリクラゲ属のヒドロ虫にはミドリイシ属サンゴに付くものもある。両者は互いの刺胞にどのように対応しているのだろうか、大変興味深い。なお、センナリスナギンチャクの学名は、写真を見ていただいたスナギンチャク類の系統分類学研究の第一人者であるJ.D.Reimer博士より、*Parazoanthus* 属から本属に変更すべきと聞いたので、それに従った。



撮影：岩尾研二
撮影日：2010年12月12日
場所：阿嘉島クシバル

編集後記

編集 岩尾研二（研究員）

今号に寄せられた「食用クラゲ」や「海草」の原稿を読んだり、執筆者とやり取りをしたりすると、どの生物も分類の変更や混乱が問題になっていることが分かります。自然の区別を読み取ろうとする分類学は、生物によってはなかなかうまくいかず、ときには哲学的です。分類学の混乱は造礁サンゴも同じで、もしかしたらさらに深刻かもしれません。おまけに、サンゴについては術語学（terminology）も、どうやら問題が多いようで、分類群を定義するための用語の定義の解釈がまた人によって違うという困った状況です（そもそも「造礁サンゴ」がどんな定義で、どの分類群を指すのかすら、統一されていないのではないのでしょうか）。現在、造礁サンゴでの混乱を解決しようと日本造礁サンゴ分類研究会が精力的に活動していますが、まだ道のりは長そうです。きっと他の分類群でも同じような状況が見られるのでしょうか、こうしたお金になりにくい分野には、日本ではあまり関心がもたれません。技術の発展や知識の深化に不可欠な、こうした基礎学問への理解と援助を心から願っています。



発行人
ESTABLISHMENT OF TROPICAL MARINE ECOLOGICAL RESEARCH

財団法人熱帯海洋生態研究振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ614号 TEL. 03-3490-7266 FAX. 03-3490-8278

AKAJIMA MARINE SCIENCE LABORATORY

阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179 TEL. 098-987-2304 FAX. 098-987-2875

E-mail: amsl@oki-zamami.jp Homepage URL: <http://www.amsl.or.jp>